

研究ノート

観光学の科学的認識への問いかけ
——「観光客」概念の批判的基礎論を手がかりとして——

安 村 克 己

Epistemological Queries about the Scientific Recognition in Tourism Studies :
With Reference to the Critical Studies
on the Concept of “Kankou-kyaku (in Japanese)”

Katsumi YASUMURA

Abstract

This paper discusses the issues present in the critical foundation of tourism studies with reference to the scientific epistemology of the term “tourist.” The scientific recognition of “tourism” as a social phenomenon in tourism studies is, as with other social sciences, constructed from the origins of ordinary recognition, and is affected by the value and meaning systems that are given importance in ordinary recognition. Similarly, scientific recognition of the term “tourist,” one of the main concepts of tourism studies, has a close relationship with ordinary recognition. However, the critical consideration of ordinary recognition of the term “tourist” has hitherto been overlooked in tourism studies. As a result, the concept of “tourist” is uncertain and ambiguous ; moreover, the conversion of this concept from ordinary recognition to scientific recognition has not been accomplished. In the conversion of tourism studies from scientific recognition to ordinary recognition, this paper concludes that critical considerations in tourism studies are required from two points of epistemological issues, that is, “theory-ladenness” and “value and meaning-giveness.”

キーワード：観光客、日常的認識、科学的認識、理論負荷性、価値—意味付与性

Key words: tourist, ordinary recognition, scientific recognition, theory-ladenness, value and meaning-giveness

I. はじめに

本稿は、観光学における日常的認識と科学的認識の関係について、「観光客 (tourist)」研究の批判的基礎論を手がかりとして考察する。

「観光客」研究は、観光学の全体にかかわる批判的基礎論に展開しうる。というのも、観光客は、とくに観光客送り出し社会 (tourist-sending society) において、観光という現実の中心に位置づけて認識される研究対象だからである。観光客送り出し社会の日常的認識では、一般的に、観光は観光客を主体とする行動から生起する事象として発想される。

また、観光客送り出し社会では、一般的に〈観光客は低俗だ〉と評価されがちである。観光客と観光が強く結びつくという日常的認識から、観光も同様に、たいていは儚い通俗的な事象とみなされる。とりわけ観光による観光地へ悪影響は、国際的に観光客の低俗さと結びつけられることが多い (安村 2001: 116-17)。

こうした観光事象についての日常的認識は、観光学の科学的認識においていかに取り扱われるのか、本稿はこの問題に関連する課題を、とくに「観光客」の概念を手がかりとして考察する。そうした考察のうえで、観光学が観光客や観光事象の日常的認識と科学的認識の関係をいかに捉えるか、という批判的基礎論の課題を提起したい。

II. 研究対象の日常的認識と科学的認識

観光学の研究対象にたいする科学的認識は、〈日常言語で指示される概念〉を起点として、つまり日常的認識にもとづいて構成される。そこで、観光学による観光事象の客観的な把握は、観光事象の日常言語を準拠枠とする日常的認識から、理論を準拠枠とする科学的認識に転換されて、はじめて達成される⁽¹⁾。

そして、通常、ある科学における研究対象についての日常的認識は、その科学的認識によってしばしば覆される。例えば、日常的認識の天動説は、物理学の科学的認識によって地動説に転換された。同様に、観光学の科学的認識が、観光の日常的認識にコペルニクスの転回をもたらす可能性がある (かもしれない)。

ただし、社会科学の研究対象をめぐる日常的認識と科学的認識の関係には、自然精密科学の場合に比べると、認識論上における不確定性の度合いがきわめて高い。自然精密科学の研究対象にも日常的認識と科学的認識の関係は存在するが、その科学的認識は、理論の根拠によって、日常的認識の主観性や多義性などを捨象し、結果的に日常的認識から分離された (安村 1988)。しかし、社会科学における日常的認識と科学的認識の関係は、後述 (IV.) するように、容易に分離されず、さらには分離が可能か、あるいは分離が適正かどうかさえも明らかではない。

実際に、社会科学における日常的認識と科学的認識の關係にみられる不確定性は、研究対象の定義の曖昧性に反映されている。例えば、経済学の「経済」、社会学の「社会」、文化人類学や民俗学の「文化」などといった研究対象の定義が、それぞれの学問分野において、すべての研究者間に一致して共有されているかどうかは疑わしい。そうした曖昧な定義は、主として、社会科学の各分野において研究対象の日常的認識と科学的認識の關係が不確定である状況に起因する。

最も先進的な社会科学として一般的に評価される経済学では、他の社会科学分野に比べて、その研究対象である経済の定義が、ほぼ確定しているかにみえる。経済学における研究対象の定義がより明瞭だとみなされるのは、おそらく、経済学が精密理論の構成に成功したからである。その経済理論によって、経済事象の科学的認識が可能となり、経済学はその科学的認識から誘導される知識を蓄積し、実際に、その知識にもとづいて経済政策などの実践に多大な影響力を及ぼしている。このような経済学の現状において、その研究対象の定義は明瞭であるはずだ、と一般的に想定される⁽²⁾。

ところが実際には、経済学においてさえ、〈日常言語で指示される経済〉のニュアンスが各国で異なるために、例えばそれぞれの現実に経済理論を適用すると、経済学の科学的認識に様々な撞着矛盾が生じる。経済学者の間で、ある経済状況についての判定が正反対であったり、経済政策についての提言が対立したりする理由の一端には、経済の現実をめぐる日常的認識と科学的認識の間にある齟齬が絡んでいそうだと。

経済学でさえも日常的認識と科学的認識の關係がときに曖昧なのであるから、研究成果の集積が不十分である社会科学においては、研究対象の科学的認識と日常的認識の区別が不明瞭であるにちがいない。そして、1970年代初めからようやく着手された現行の観光学では、その關係が不明瞭なばかりか、混乱しているようにさえみえる。

そもそも、現時点（2018年）において、観光学が研究対象とする観光、もう少し詳しくいえば、日本語で「観光」として日常的に認識されている事象が、ある一般概念においてグローバルに包摂され共有されるかどうかさえも疑問である。日本の観光学は、全般的に、日本語の「観光」に相当する事象とその概念が、世界中に遍在するとみなして、その事象を研究対象とする。

しかし、日本語の「観光」事象が、それに対応して翻訳される外国語の事象、とりわけ英語の“tourism”事象に相当するかは、ときに議論される。というのも、英語は、観光学が最初に形成され、その文献が最も多い米国の言語であり、世界の共通言語とみなされるので、「観光」をエティックな視点——たとえば、現象的特徴の共通項による定義——で“tourism”と同一視したものの、イーミックな視点——たとえば、日常語のニュアンス——では、両方の一致がしばしば疑問視されるからである。

そこで、日本の観光学において、「観光」と“tourism”を表現上で一致させるために、「観光」の代わりに「ツーリズム」というカタカナ表記が提案される場合がときにある⁽³⁾。この提案の根底には、観光学の研究対象として「観光」という言葉を用いることへの違和感、さらには日本社

会において「観光」の日常的認識にかかわる、何らかの違和感が潜んでいそう。

同様に、本稿が焦点をあてる観光客についても、次のⅢ. でみるように、その日常的認識に微妙な価値判断が絡みあい、多くの観光研究者が観光学に「観光客」という用語を使うことに、違和感をもっている。しかし、そうした違和感について、日本観光学がこれまで徹底的に追究した形跡はほとんどない。そこで、観光学における日常的認識と科学的認識のかかわり方について、次に、「観光客」概念を手がかりとして、「観光」概念に絡めながら探りたい。(なお、以降では、仮に tourism = 観光と tourist = 観光客として論じる。)

Ⅲ. 観光客についての日常的認識と科学的認識

1. tourist についての日常的認識とその訳語

観光学が欧米で生まれた実状から、tourism の場合と同様に、欧米以外の社会では、tourist に相当する言葉を、それぞれの社会の日常言語に置き換えるのだが、その翻訳された概念がそれぞれの社会の間で一致するのか、あるいはどの程度まで近似するのかは、定かでない。いずれにせよ、日本語では、一般的に、“tourist” は「観光客」と翻訳される。

現代日本社会の日常言語で〈観光をする個人やその集合〉を意味する「観光客」という言葉は、一般的に、どちらかといえば「取るに足りぬ」、「低俗」とさえいえる意味合いをもつようだ。そのために、日本社会において、観光地を訪れた観光客には、自らが観光客とよばれるのを嫌う傾向がみられる。

そして、日本語の「観光客」と同様に、英語の“tourist”という言葉にも、なにか「低俗」で「儂い」ニュアンスがあるらしい。例えば MacCannell (1999: 9-10 = 2012: 9-11) は、Boorstin (1964: 87-88 = 1964: 99) の引用や自らの経験的事例をあげて、〈“tourist” への嘲笑が当節の知的高尚さを意味し、さらに“tourists” は“tourists” を嫌いだ〉とった事情を指摘する。

このように、MacCannell (1999: 1 = 2012: 1) は、“tourist” が「取るに足りぬ」という含意のある概念として日常的に認識されることを指摘するが、他方で、高度近代社会の構造分析を目論む科学的認識において、“tourist” が「一般的な近代人に適用できる最良のモデル」だ、と主張する。MacCannell (1999) は、観光と観光客の日常的認識を、観光学の科学的認識に変換しようとした。

こうした MacCannell (1999) の“tourist” 概念を、どのような日本語に翻訳するのか、について考えてみたい。それによって、観光学の研究対象となる tourist と観光客の日常的認識についての同異点が比較されよう。

MacCannell (1999) の翻訳書『ザ・ツーリスト 高度近代社会の構造分析』(2012) では、“tourist” が「観光客」と訳されている。これは「観光客」という言葉を、現代日本社会において、〈観光をする者〉という通常の日常語の概念を踏まえた訳と考えられる。

しかし、同訳書を書評した橋本（2014：173）は、“tourist”を「観光客」と訳すことに「違和感を覚えて」異議を唱えた⁽⁴⁾。そして、橋本（2014：173）は、次のような理由から、“tourist”に「観光者」という語を充てることを提案する。

この「観光客という訳語を用いる」場合の「客」とは誰かにとっての客をさす。ツーリストは、宿泊業者にとっては「宿泊客」となり、運搬業者にとっては「乗客」となり、観光業者にとっては「観光客」になる。しかし、観光研究者としては、〈観光をする者〉を指す「観光者」という語を使用すべきであると考えている。

同様な見解は、それ以前からあった。評価の高い観光学の教科書である、前田勇編著『新現代観光総論』（学文社 2015 年）においても、次のように提示されている。「観光者は通常観光客と呼ばれるが、客という言葉は一般にはビジネスの対象となる場合に用いられるので、本書では観光主体を意味する用語として観光者を用いる」（前田 2015：10）。そして、こうした「観光者」という訳語の選択について、賛同する観光研究者は少なくない。

しかし、日本語の「客」という語には、商業的な含意があるだけではない。例えば、『広辞苑』によれば、「客」には、①訪問してくる人、まろうど、②主に相対する地位、主人の側でないもの、③自己に相対するもの、④旅人、また旅先、⑤一道に長じた人士。⑥商売で料金を払う側の人、などの意味がある。

辞書に倣えば、観光「客」の言葉が〈観光をする者〉の意味をもつとみなしても、さほど無理はない。実際に、日本社会において多くの人々は、日常的に〈観光をする者〉という意味で「観光客」の言葉を用いる。つまり、観光客は、〈観光をする者〉の日常的認識を反映する言葉である。

それにもかかわらず、観光学の用語として「観光客」を使うことに、多くの研究者が「違和感を覚える」のはなぜか。この違和感は、おそらく、「客」という語の表示内容よりも、「観光客」の日常的認識に「とるに足りぬ」とか「低俗な」といった含意から生じるのではないか。そうだとすれば、観光研究において「観光客」という用語を適用するさいの違和感は、観光学が日常的認識と科学的認識との関係を十分に議論しえていない事態に帰着する。

この事態を議論するにあたってよい手がかりのひとつとなるのは、如上の MacCannell（1999）による観光学の研究であろう。それは、低俗な「観光客」の日常的認識を踏まえたうえで、「近代人のモデルとしての観光客」という科学的認識を探究した。この探究の方法論において、「観光客」をめぐる日常的認識と科学的認識の関係が浮かびあがる。この点について、次に検討したい。

2. 日常的認識から科学的認識への転換

観光客について科学的認識の研究成果を提示した、MacCannell（1999）による観光客研究の方法論をみてみよう。MacCannell（1999）は、観光化する高度近代社会の構造分析を試みて、tourist＝観光客が織り成す現実の日常的認識を民族誌的基盤から描出し、それを起点として観光と観光客の科学的認識を剔出した。このとき、tourist＝観光客とそれにかかわる現実が、丁寧な観察を通して、ありのままに描き出される。その方法論について、MacCannell（1999：xvii＝2012：viii-ix）は、次のように主張する。

……細かな観察と、記述対象となる人たちと同一化することはないにしても、その人たちとの共同生活体験に基づいた記述が必要であり、記述が、客観的な専門家（例えば、社会学者や批評家）の視点、〈と同時に〉記述される状況下において影響を受ける人たち、この場合では観光客〔tourists〕と、特に観光客〔tourists〕が見物にきた人たちとの両者の視点からも洞察的であるべきこと、そして最後に、現実の場所で現実の人々を観察することへのこだわりが、社会的・文化的理論の構築より常に優先されるべきことが、認識されなければならない。

この引用には、日常的認識を基盤にすえた、観光客にたいする MacCannell（1999）の研究態度が明らかであり、さらに、その日常的認識にもとづき、理論構築をととして科学的認識を構成しようとする方法論もうかがわれる。実際に、MacCannell（1999）全体において、tourist＝観光客と tourism＝観光の観察結果を優先しながらも、理論を無視してはいない。むしろ、MacCannell（1992；1999）による観光研究の全体において、理論は重要な位置づけがなされている。

観光客研究において、MacCannell（1999）は、近代世界「全体」の構造分析という方法論にもとづき、「観光対象の記号論（semantic of tourist attraction）」等の手法を駆使して、「近代人のモデルとしての観光客（tourist as model for modern man）」を剔出した。前述のように、MacCannell（1999）は、“tourist”の日常的認識の低俗な価値－意味付与性を確認したうえで、“tourist”の科学的認識として典型的な近代人としての tourist を描き出した。

MacCannell（1999）によれば、tourism は、近代人が近代の真正性を求める儀式である。そして、近代化がその本質である社会構造の分化・細分化によって不明瞭となった組織や事象の仕組みや、近代化から取り残された組織や事象を、宗教的シンボルと同型に観光対象（tourist attraction）として創出するのにたいして、tourist は、その観光対象を宗教的儀式のように追い求める。tourist は、こうして典型的な近代人となる。ここに、MacCannell（1999）社会学による tourist の科学的認識が、提出された。

しかし、MacCannell（1999）において、観光客にかんする日常的認識の経験的記述とその理論的説明は、ときに混線してみえる。このことは、現実とその理論的説明を表現する MacCannell

(1999)の独自の方針に起因するのかもしれない。理論にもとづいて現実を説明する表現方法について、MacCannell (1992:6)は次のような考え方を主張する。「理論は、注、前書き、説明などで展開されてはならない。どこで1つの話が終わり、どこから次の話が始まるか、読者が気づかないほど、本論に深く埋め込まれていなければならない。」

かくして、MacCannell (1999)は、観光客研究において日常的認識と科学的認識を区別して、両認識の関係を意図的に分けながらも、日常的認識の経験的記述と科学的認識の理論的説明とを区別して表現しなかった。そして、MacCannell (1999)は、「近代人のモデルとしての観光客」という科学的認識を表示する新たな名辞 (term) も提供しない⁽⁵⁾。

この点について、観光学が、日常的認識の「観光客」概念を、科学的認識から誘導される概念と、その概念にもとづいて造語された「観光ゲスト」という名辞に取り替える一例を取りあげて、次に、その事例における日常的認識と科学的認識の関係をみてみよう。

3. 科学的認識にもとづく新たな名辞

観光学は、観光客を理論的枠組から認識して、つまり「観光ゲスト (guest in tourism)」という科学的認識にもとづく概念と名辞をしばしば適用する。「観光ゲスト」という概念は、観光のホスト-ゲスト論 (Smith 1989) や観光システム論 (安村 1996:46-48) などの理論的枠組において使用されている。

観光学において「観光ゲスト」という用語を最初に使ったのは、Smith (1977) である。Smith (1977, 1989) は、文化人類学者として、自らの研究のフィールドに侵入する、研究の邪魔者となる観光客を考察から除外せず、むしろ観光客に着目して観光人類学を創設した。そのさい、観光のホスト-ゲスト関係という理論的枠組を設定して、文化人類学研究のフィールドにおける観光の実態を明らかにした⁽⁶⁾。

Smith (1989:11-17) は、観光のゲスト-ホスト論の理論的枠組にもとづいて、観光客類型 (types of tourists) を提示した。すなわち、観光客の人数 (規模)、目的、地域規範への順応という条件から、ゲストがホストや地域に及ぼすインパクトに応じて、観光客を7つに類型化する。こうして、Smith (1989) は、「観光ゲスト」という科学的認識から、観光客の類型化をとおして〈観光客の一般的認識を科学的認識に転換〉した。

また、観光システムの枠組から⁽⁷⁾、観光客を観光ゲストと捉える見方もある (安村 1996:46-48)。観光システムとは、観光という事象が3つの役割要因から成り立つ構図として設定された枠組である。すなわち、観光学において、観光はゲスト、ブローカー、そしてホストという、それぞれの役割要因の相互作用によって成り立つ社会現象となる。これは、Smith (1977) のホスト-ゲスト論に、ホストとゲストを仲介するブローカーを加えて構成された理論的枠組であり、「観光」概念の外延を確定する理論的枠組とみなされる⁽⁸⁾。

この理論的枠組において、観光のゲスト、ホスト、ブローカーの行動がそれぞれに研究対象と

なり、それらの行動の相互作用や、相互作用の結果として生じる様々な観光事象なども研究対象となりうる。

また、この観光システムの構成は、それぞれに互換的な役割要因の相互連関が均衡する定常状態として、理論的に特徴づけられる。このような観光システム論の応用例として、例えば、ゲスト、ホスト、ブローカーによる適正な相互作用の保持が、持続可能な観光を実現する機能的要件の1つとして、理論的に誘導される⁽⁹⁾。

こうして、観光客についての日常的認識から理論的枠組による科学的認識への転換は、観光客と観光学の概念を新たに規定し、その概念にもとづいた新たな名辞を造語して、新たな知見を形成しうる。しかし、観光システムという理論的枠組から導かれる科学的認識は、観光の日常的認識の影響によってしばしば影響をうける。この点について、次に議論をくわえたい。

4. 日常的認識による科学的認識への影響

観光システム論がうける日常的認識の影響を検討しよう。観光システム論では、ゲスト、ブローカー、ホストの相互作用が統一的観点からそれぞれ等価に、つまり各役割要因の機能が同等に認識されるはずだが、観光システム論の科学的認識においてさえ、ゲストが特異な視点から捉えられがちとなる。すなわち、観光客による「楽しみを目的とする旅行」という日常的認識の影響によって、観光システム論がゲストに焦点をあてて発想される。このことは、日本の観光学に限らず、欧米の観光学においても同様である。

観光客中心の日常的認識が影響した一例をあげると、観光システム論において「観光行動 (tourist behavior)」といえは、その主体はゲストとみなされがちである。観光事象がゲスト、ホスト、ブローカーから成り立つ社会現象であり、「観光行動」を観光事象にかかわる各主体の行動とみなせば、理論上では、ホストやブローカーなども「観光行動」の主体となりうる。しかし、「観光行動」と聞いて、その主体がホストやブローカーとは想起しにくい。これは、観光は「楽しみを目的とする旅行」という日常的認識を反映した、観光の科学的認識への影響と考えられよう。

このように生じる、観光の日常的認識による影響は、観光システム論における理論的観点にズレが生じる、という問題である。それは、ゲスト、ブローカー、ホストにおける現実の立場が不平等だ、という現実の問題と何かしら関連しそうだ。実際に、現時点 (2018 年) の特に発展途上社会における国際観光では、経済的に豊かなゲストと貧しいホストという役割が固定化して、その関係は不平等である (安村 1995)。

また、観光の歴史をたどると、大衆観光以前の「観光客」=“tourist” が出現しない社会では、「観光」=“tourism” の現実が生起せず、「観光」=“tourism” という言葉も発生しなかった。現代でさえ、フランスの大学で 1960 年代に観光社会学を講義した Lanfant (1993 : 74 = 1995 : 85) は、その講義に出席した第三世界の留学生にとって、「観光 [tourism] やレジャーは、自分の言語の

語彙に影も形もなかった」と回想する。しかし、第三世界の学生は、自身の本国において外国人観光客を受け入れるための観光開発（tourism development）に直面し、観光（tourism）やレジャーの言葉を習得する事態を迫られた（Lanfant 1993 : 74 = 1995 : 85）。

こうした観光の現実、日常的認識による現実であり、観光研究の課題としても有意味である。しかし、観光システム論による科学的認識の現実、ゲスト、ブローカー、ホストの役割要因から成立する現実であり、日常的認識の現実とは別次元の理論的事実となる。

如上のように、観光客の日常的認識と科学的認識は、複雑に絡みあいながらも、別次元の認識である。そこで、観光研究者は、観光客の日常的認識と科学的認識との関係について、あらためて批判的考察をくわえなければならない。それは、観光客研究の批判的基礎論となる。その批判的基礎論の課題を、次に検討する。

Ⅳ. 観光学の批判的基礎論とその課題

現状における観光学の観光客研究は、観光客の日常的認識と科学的認識を区別せずになされている。両方の認識を区別しないというよりも、科学的認識をめざす研究にあたって、日常的認識に無頓着である、というべきかもしれない。おそらく、観光学が「楽しみを目的とする旅行」という観光の表層的な定義をいまだに乗り越えられない状況も（東 2017 : 27）、観光客の日常的認識と科学的認識の関係を的確に把握できないからにちがいない⁽¹⁰⁾。このような観光学の現状を刷新するために、観光学の批判的基礎論が、観光研究者各自に求められる。

その批判的基礎論における当面の課題について、これまでにみた観光客研究を手がかりとして振り返ると、2つの課題が浮かびあがる。観光学の批判的基礎論には、日常的認識と科学的認識の峻別を前提としたうえで、ひとつに〈日常的認識から科学的認識への転換がいかになされるか〉という課題があり、そしてもうひとつに〈日常的認識が科学的認識にたいしてどのような影響を及ぼすか〉という課題がある。この2つの課題をみてみよう。

第一の課題は、科学的認識における理論構築の課題とみなされる。観光事象を研究対象とする科学的認識は、その日常的認識を踏まえたうえで、その日常的認識とときに対抗するような「理論」構築によって、はじめて構成される。一般的に、日常的認識と科学的認識を区別する点は、「理論」という認識・説明・予測における準拠枠としての根拠の提示にみいだされる。科学的認識における理論という準拠枠は、認識に必然的真理と経験的真理を確保し、客観的な認識を可能にする（安村 2013）。

このように、科学的認識のメカニズムは、理論が先行して現実が認識される「理論負荷性（theory-ladenness）」（Hanson 1958）の特徴をもつが、日常的認識においても、「理論負荷性」と同型の認識論的メカニズムがみられる（安村 2013）。すなわち、科学的認識に〈客観的な認識の根拠となる理論〉という準拠枠が予め介在するように、日常的認識にも「言語」という準拠枠が

つねに、そしてたいていは暗黙裡に存在する。

しかしながら、日常的認識の言語では、認識像（認識内容）において、個人差や文化・社会間の差異が発生しうる。したがって、観光事象の日常的認識が科学的認識に転換するには、観光事象を認識する準拠枠が、「言語」から「理論」に転換されねばならない。

したがって、日常的認識から科学的認識への転換とは、〈認識の視点の転換〉であり、かつ〈視点の転換から誘導される認識像の転換〉である。そして、認識の視点とは、論理的に構成され経験的に検証された準拠枠としての「理論」であり、認識像の転換とは、理論によって導き出される現実の「知識」とみなされる。

かくして、第一の課題は、観光研究者が観光事象の「理論」を構築し、それを明示することで達成される。

次に第二の課題は、〈日常的認識にまわりつく「価値－意味」が、科学的認識においていかに取り扱われるか〉という問題に置き換えられる。物理学などの自然精密科学では、それらの研究対象の科学的認識に「価値－意味」が付着する問題は、存在しない。そうした問題は、ときに物理事象の日常的認識において擬人化などの介入によって発生しうるが、それらの物理事象にかんする科学的認識が普及すると日常的認識の「価値－意味」問題は払拭される。というのも、自然世界の物理事象そのものに、もともと「価値－意味」が存在しないからだ（自然世界の「価値－意味」は、人間によって付与される）⁽¹¹⁾。

ところが、社会文化事象は、元来、「価値－意味」によって構成されている。だから、社会文化事象の「価値－意味」そのものが研究対象ともなりうる。たとえ社会文化事象の科学的認識が構成されたとしても、その科学的認識から「価値－意味」を捨象するには、研究者自身が「価値－意味」に囚われているので、相当な困難がともなう。そもそも、社会文化事象は、本質的に「価値－意味」を容易に切り離せそうにない。こうした社会文化事象の本質を、本稿は社会文化事象の「価値－意味付与性（value and meaning-giveness）」と呼ぶことにする。

とはいえ、社会文化事象の科学的認識から「価値－意味付与性」の切り離しが困難であるにせよ、とりあえず、社会文化事象の研究において、日常的認識と科学的認識がそれぞれに考察され、そこに関連する「価値－意味付与性」の抽出がもとめられる。観光学を含めて社会学者は、研究対象の日常的認識と科学的認識における「価値－意味付与性」を自覚し、それらの認識の関係を念頭におきながら、科学的認識に着手しなければならない。

かくして、第二の課題は、観光研究者が自身の研究対象である観光事象の「価値－意味」を考察することで対処される。

如上の議論を踏まえて「観光客」研究を再考すれば、観光学における日常的認識と科学的認識の関係についての批判的考察は、従来、看過されてきた。観光学の研究対象である“tourist”や「観光客」には、むしろ「価値－意味付与性」という性質があり、その「価値－意味付与性」は、繰り返すように、現時点（2018年）において何かしら「低俗」なニュアンスを含んでいる。し

かし、そうしたニュアンスにたいして、観光学は何となく違和感を抱くだけで曖昧にしたり、そのニュアンスを意図的に除外したりしてきたのではないか。

V. おわりに

観光研究が観光事象の日常的認識に影響を受ける事態は、観光学の成果が集積し始めた時期から夙に指摘されたが（Jafari 1990）、観光学における日常的認識と科学的認識の関係は、十分に議論されなかった。今後、観光の科学的認識から導出される知識を蓄積するために、観光研究者は、研究の出発点から、日常的認識と科学的認識のかかわり方を意識的に検討しなければならない。その検討は、観光学の批判的基礎論なる。

本稿で議論した観光学の研究対象となる観光事象の研究において、観光研究者が取り組むべき批判的基礎論の作業は、次のように整理される。

- ① 日常的認識と科学的認識を峻別する。
- ② 日常的認識から科学的認識の転換をはかるさいに、「理論負荷性」に留意して、科学的認識の根拠となる理論を構成し明示する。
- ③ 日常的認識がもつ「価値－意味付与性」を前提として、日常的認識が科学的認識に及ぼす影響を探知する。
- ④ 日常的認識と科学的認識の関係を踏まえて、日常的認識における「価値－意味付与性」そのものについても探究する。

これらの批判的基礎論における作業の実践によって、観光学の科学的知識は今後さらに集積され、その知識が観光の現実問題や観光政策に適用されるようになるであろう。観光学が形成され始めた1970年代以来、観光学の科学的知識はかなり蓄積されてきたが、その知識が観光政策などに適用されているとはいえない。

その一例として、マス・メディアや行政機関などが使う観光関連の用語をみると、それらの用語に観光の日常的認識と科学的認識が交錯している。例えば、日本の観光行政や観光事業では、「ニュー・ツーリズム」や「着地型観光」という言葉が用いられ普及し、ときに観光研究者さえもそれらの言葉が無条件で用いるのだが、これらの言葉は、1980年代から観光学で議論された「オルタナティブ・ツーリズム」や「コミュニティ型観光」の概念にそれぞれあてはまる。こうした同様な概念、例えば「ニュー・ツーリズム」という日常的認識にもとづく新たな言葉が普及すると、その言葉には、それ以前に集積された「オルタナティブ・ツーリズム」や「持続可能な観光」の科学的認識から誘導された観光学の知識がほとんど反映されない。つまり、観光学の知識は日常的認識に影響を与えておらず、その知識をもって観光政策等に提言できていない、ということである。

そうした日常的認識と科学的認識の錯綜は、観光学の成果がいまだ一般的に認知されない状況

の証左である。観光研究者は、観光学の知識が広く普及するように求められ、そのためには今が、観光研究者が観光学の批判的基礎論を議論すべき時期となる。

本稿の議論は、観光学において研究対象の日常的認識と科学的認識の関係についての検討の緊急性を問題提起するにとどめる。この問題提起について、さらに観光研究者に求められるのは、各自の研究対象を経験的に研究すると同時に、その研究の基礎論を批判的にも考察することである。

註

- (1) 本稿でいう「科学的認識」とは、〈研究対象を客観的に認識しようと志向する結果〉である。〈社会科学の科学的認識が自然精密科学のそれと同型か〉という基礎論の問題について、本稿筆者は、自然精密科学とは異なる社会科学の科学基礎論を探究している。この点については、本稿で言及されないが、拙稿（安村 2013）を参照されたい。
- (2) ただし、現代の主流派である自由主義的な経済学の「経済」概念にたいして、様々な批判が寄せられている。それらの批判には、例えば、Costanza（1991）や Sedlacek（2011）などに顕著である。
- (3) 「ツーリズム」というカタカナ表記については、「観光」という語の日常的認識の含意が消失してしまう（その消失を目的として使用するのかもしれないが）。日本社会では、外来語がしばしばその発音をカタカナで表記して用いられる。すでに日常語に普及して、多くの人々が概念を共有できればよいが、近頃、概念が不明なカタカナ語が少なくない。例えば、大学教育で用いられるファカルティ・デベロップメント、リメディアル、アクティブ・ラーニングなどの言葉について、それらを耳にした当初、本稿筆者はそれらの意味を即座に理解できなかった。観光学でも、オーセンティシティやマス・ツーリズムなどの用語は、多くの場合にカタカナで表記されるが、従来からそれぞれの概念を指示する「真正性」や「大衆観光」という言葉があるのだから、従来通りの言葉を用いたほうが、だれもが即座にそれらの概念を理解できるのではなかろうか。
- (4) 橋本（2014: 173）は、「翻訳者たちがタイトルを『ザ・ツーリスト』とし、日本語の訳語である「観光客」を使用しなかったのは、彼らもまた違和感があったからであろうと推測する」。そのタイトルの決定にかんする内実について、本稿筆者は、当の翻訳書について、翻訳者の1人であった立場から回顧すれば、訳者のなかに「観光客」の訳語に違和感をもち、その訳語について異論があったのは確かである。しかし、最終的に、訳者は、本稿筆者の説得もあり、MacCannell が使用する“tourist”に相当する日本語を「観光客」と決定した。そして、題名については、当初は本書の内容に則して、「観光客」とすることも考えたが、それでは〈読者の関心を喚起できない〉と議論された。そこで、原題の *The Tourist* のカタカナ表記を用いることに決めた。私以外の翻訳者にはそれぞれの理由があったと思われるが、「ザ・ツーリスト」という書名に賛同した。
つまり、「ザ・ツーリスト」という言葉を書名に用いたのは、第一に「商業的」な理由であった。ただし、その事由をさらに突きつめると、「観光客」では訳書が商業的に芳しくない、という原因があった。それは、「観光客」という語が、想定される読者に何らかの違和感を抱かせる、おそらくその語がもつ「低俗なニュアンス」がある、と翻訳者たちが感じたからだ。それでも、MacCannell（1999）は、本書において、その「低俗なニュアンス」を“tourist”にもたせている。
- (5) ただし、MacCannell（1999）は、「観光客」の意味で“tourist”と“sightseer”をしばしば詳細な説明もつけずに使い分けていたが、その後の文献（MacCannell 2011）では、“tourist”が主体的に「みる」行為の本質を強調して、“tourism”から“sightseeing”を区別し、さらに“sightseeing”の行為主体を“sightseer”と呼ぶことを主張する。
なお、「観光」の語源とされる〈光を観る〉の意味に拠れば、その「観光」には“sightseeing”という訳語の適用が、より当てはまるであろう。しかし、日本語で現在用いられる「観光客」の意味は、必

- ずしも「みる」主体に特定されていないので、“tourist”の言葉に近いとみなせよう。
- (6) 観光ゲスト・ホスト論は、「楽しみを目的とする旅行」という観光の定義を反映する、観光客を観光研究の中心とすえた認識論にたいして、観光客とそれを受け容れる観光地住民や観光地を同時に射程にのせた認識論を提示した。
 - (7) 観光システムという用語を最初に提示したのは、Leiper (1979) である。ただし、Leiper (1979) は、観光のゲスト、ブローカー、ホストという言葉を使用していない。
 - (8) Smith (2001: 276-277) は当初、ブローカーの概念を設定しなかったが、後に「文化ブローカー (culture broker)」という言葉を用いている。
 - (9) 例えば、UNWTO は、持続可能な観光の実践をめざして制定した世界観光倫理憲章 (Global Code of Ethics for Tourism 1999) において、観光システムの構図にもとづいて、観光関係者としてのゲスト、ブローカー、ホストが観光行動においてそれぞれに果たすべき役割を定めた。ただし、この規定では、観光のゲスト、ホスト、ブローカーという言葉は、用いられていない (ホストについては、host community、host country、host region といったかたちで使用された)。
 - (10) 東 (2017: 27-30) は、観光学の研究状況について、「楽しみのための旅行」という観光の定義に関連づけて、「日本の観光学は実学中心である」と指摘する。この見解は必ずしも的確ではないが、「観光学は、観光の本質を考えていない」とする東 (2017: 28) の主張は、観光研究者にとって傾聴に値しよう。東 (2014: 2017) は、現代社会における社会関係の「弱いつながり」を哲学的に思索し、その思索にもとづき、さらに、その「弱いつながり」の典型的な主体として「観光客」を指摘した。そのさいに、東 (2017: 15) は、「観光」を「じつに商業的で即物的で世俗的な言葉」と捉え、「観光客」という言葉にも「低俗」なニュアンスがあることを前提とする。そのうえで、東 (2017) は、「観光」と「観光客」の本質を探究した。その哲学的探究は、科学的認識かどうかはともかく、論理的であり、「観光客」の日常的認識にたいして、それらの本質を剔出しようとする。
 - (11) 本稿へのある匿名査読者から、本稿が主張する〈日常的認識と科学的認識の峻別〉について、「価値－意味付与性」に触れられながら、次のような指摘を受けた。

日常的認識を科学的認識から峻別するべきだとする著者の主張は、社会科学のモデルを自然科学のモデルに近づけるべきだとするデュルケム以来の古典的社会科学論を前提にしているように思われる。例えば、著者は、「物理学などの自然精密科学では、それらの研究対象の科学的認識に「価値－意味」が付着する問題は、存在しない」とする。なぜなら、「物理的事象そのものに、もともと「価値－意味」問題は存在」せず、それが出てくるのは人間が介在したとき」だからだとしている。(9 頁) しかし、クーンのパラダイム論が明らかにしているように、自然科学の理論構成においても価値の問題を無視することはできない。理論的認識は純粋な自然的事象ではなく、人間的認識によって構築される人間的営みであり、科学的認識と日常的認識を峻別して、後者の価値付与性を警戒するべきだとする著者の主張は、そもそも科学的モデルの構築に懐疑的な人類学的立場や、社会学的理論においても、エスノメソドロジーなどの現象学的社会学やブルデューなどの「エイジェンシー」論の成果を踏まえていない 1960 年代までのパーソンズ流のシステム論を想起させ、かなり問題を感じるものと言わざるを得ない。(傍点は本稿筆者による)

この指摘は、本稿の論旨を誤読している。〈日常的認識と科学的認識の峻別〉は、「社会科学のモデルを自然科学のモデルに近づけるべきだとするデュルケム以来の古典的社会科学論を前提にしている」という指摘と結びつかない (Yasumura 1988)。デュルケムの主張は、〈社会 (科) 学における自然科学的認識と方法の適用〉であって、〈日常的認識と科学的認識の峻別〉ではない。また、「クーンのパラダイム論が明らかにしているように、自然科学の理論構成においても価値の問題を無視することはできない」という指摘については、研究対象の「価値－意味付与性」がパラダイム論と無関係であることは、言うまでもない (安村 1984)。パラダイムは、自然精密科学の主流理論を支えるパラダイムが、研究者の主観的・非論理的な制度的基盤で成り立ち、その〈理論の展開が連

統的でも累積的でもない」ことを明らかにしたが、自然精密科学の研究対象の「価値－意味付与性」については全く言及されていない。

人間や人間社会から独立し「そこにあるもの」としての自然それ自体は、価値や意味をもたない。自然の価値や意味は、人間によって付与されたものであり、それに対して、人間が創出する「そこにつくるもの」として社会現象は全て価値と意味から構成される。

自然現象の自然精密科学認識論に、どれほど、研究者の主観——たとえば、アインシュタインのいう自由の創意 (free invention) ——や、主流学派の特殊な規範や方法——例えば、クーンのいうパラダイム——が、理論構成の出発点になっていたとしても、自然精密科学の理論構成は、理論の数学的表示と実験による経験的検証によって、理論の客観的真理と経験的真理を達成しえた (安村 2013)。その達成は、研究対象としての自然現象それ自体に「価値－意味付与性」がない、からである。

本稿筆者の社会 (科) 学認識論は、「価値付与性を警戒するべきだ」という指摘とは無縁だ。むしろ、社会 (科) 学の研究対象における「価値－意味付与性」は、社会 (科) 学の理論構成に必然的に取り入れなければならない、とするのが本稿筆者の立場である (安村 2013)。

本稿筆者は、「エイジェンシー論」を否定するものではないが、それだけに与するものでもなく、無論、パーソニアンでもなければ、パーソンズと同時期の論理実証主義者でもない。

「価値－意味付与性」を社会 (科) 学の理論構成は、おそらく、ヴェーバー社会学認識論の「認識根拠 (Erkenntnisgrund)」と「实在根拠 (Realgrund)」という前提にもとづいて、なされることになろう (安村 2013)。つまり、社会 (科) 学の理論構成には、研究対象を“客観的”に認識する「認識根拠」に加えて、研究対象の「意味－価値」を解釈する「实在根拠」の前提が付け加えられる。本稿は、この前提にもとづいて、「観光客」の「意味－価値」が論じられている。

文献

- 東浩紀 2014『弱いつながり 検索ワードを探す旅』幻冬舎。
 ——— 2017『観光客の哲学』ゲンロン。
 橋本和也 2014「書評 近代社会の構造分析のための観光研究」『観光学評論』2(2) : 169-173。
 安村克己 1984「社会学的知識の累積的展開」『応用社会学研究』25 : 41-22。
 ——— 1988「社会学的認識の科学的基礎論に関する検討 カッシーラー哲学とヴェーバー社会学を手懸りとして」『社会学評論』38(4) : 449-463。
 ——— 1995「観光の不均衡問題とエスニック・ツーリズムの運営の“格率”」前田勇編『現代観光の展開 観光行動・文化観光・国際観光交流』(pp.45-64) 学文社。
 ——— 2001『観光 新時代をつくる社会現象』学文社。
 ——— 2013「観光学が実践の学として成立する可能性について」『観光学評論』1(1) : 35-50。
 Boorstin, D. J. 1964 *The Image ; Or What Happened to the American Dream*, Atheneum = 1964『幻影 マスコミが製造する事実』(星野郁美・後藤和彦訳) 東京創元社。
 Costanza, R. Ed. 1991 *Ecological Economics : The Science and Management of Sustainability*. Columbia University Press.
 Hanson, N. R. 1958 *Patterns of Discovery*. Cambridge University Press.
 Jafari, J. 1990 “Research and Scholarship,” *Journal of Tourism Studies* 1(1) : 33-41.
 Lanfant, M-F. 1993 “Methodological and Conceptual Issues Raised by the Study of International Tourism.” In Pearce, D. G. and R. W. Butler Eds. *Tourism research : Critiques and Challenges* (pp.70-87). Routledge.
 Leiper, N. 1979 “The Framework of Tourism : Towards Definition of Tourism, Tourist, and the Tourist Industry.” *Annals of Tourism Research* 6(4) : 390-407.
 MacCannell, D. 1992 *Empty Meeting Grounds : The Tourist Papers*. Routledge.
 ——— 1999 *The Tourist : A New Theory of the Leisure Class*. University of California Press. = 2012『ザ・ツーリスト 高度近代社会の構造分析』(安村克己他訳) 学文社。
 ——— 2011 *The Ethics of Sightseeing*. University of California Press.

- Pearce, D. G. & Butler, R. W. Eds. 1993 *Tourism Research : Critiques and Challenges*. Routledge. = 1995『観光研究の批判的挑戦』（安村克己監訳）青山社.
- Sedlacek, T. 2011 *Economics of Good and Evil : The Quest for Economic Meaning from Gilgamesh to Wall Street*. Oxford University Press.
- Smith, V. Ed. 1977 *Hosts and Guests*. University of Pennsylvania Press.
- Ed. 1989 *Hosts and Guests 2nd. Ed.* University of Pennsylvania Press.
- 2001 “The Culture Brokers.” In V. Smith and M. Brent Eds. *Hosts and Guests Revisited : Tourism Issues of the 21st Century* (pp.275-282). Cognizant Communication Corp.
- Yasumura, K. 1988 “Weber’s Sociology and the Exact Sciences : The Common Characteristics of Both Epistemologies, *The Annals of the Japan Association for Philosophy of Science* 7(3) : 131-46.

2018 年 11 月 30 日受理